

二次元ドリームノベルズ

18

未 満

下山ナンプラーの助
挿絵／シロクマ

～ふたなりちゃんぽタッグバトル～

試し読み版



登場人物紹介

Characters



むろとさえか
室戸冴香

FTB四大流派の血を引くクールなふたなり少女。他者と関わりを持つことを嫌うふしがある。



あまね みゆ
天音美結

聖珠学園に転入してきたばかりの少女。ふたなりであることにコンプレックスを感じていたが……。

番外編	番外編	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	
冴香の悪夢	催眠敗北	エピソード	夏季FTB都大会決勝	夏季FTB都大会二日目	夏季FTB都大会二日目	都大会迫って	新人戦タッグマッチ	もつと練習!	デビュー戦!	練習開始	FTB部
											プロローグ

プロローグ

「んあああああつ！　ダメダメダメ、出ちゃうううつ！　もうダメ精液出る出る出るうう！」

股間にそそり立つ雄々しき肉棒から天を貫くかと思うほどの白き奔流を噴き上げ、少女の細い身体がマットに崩れ落ちた。

スタジアムを埋め尽くす数十万人の観衆が、一斉に雄叫びを上げ。

少女は倒れてもなおその三十センチ越えの男性器から精液を吹き出し、リングに精液の池を作っていく。

「あああああ……っ！　精液い……止まらない……んはあ……っ」

「^{さえか}冴香っ！」

彼女の戦いをコーナーで見守っていた黒髪の少女が、相方の射精に悲痛な声を上げ、たまらずリングに上がってその身体を抱きかかえる。

和装をアレنجしたような美しいリングコスチュームと、短いながらも美しい銀髪が自身の精液でドロドロに汚れ、色白の整った美しい顔は快感と屈辱に紅潮していた。

「しつかりして、冴香！」

「あはああああ……美結さ……ごめんなさ……私っ……ここまで……ああ、出る、出る出る出る……まだ出てるの……精液い……止まってえ……」

絶頂の余韻で全身を痙攣させながら切れ切れに零す少女は、まだゴボゴボとペニスから精液を吹き出しつつ相棒に己の失態を詫び。

その時スタジアム中に響き渡る実況の音が、少女たちを現実へと引き戻す。

《ここでついにダウ——ン！ 聖珠学園の室戸冴香、今まで必死に我慢していたがこれには耐えきれず大量射精してしまったああああ——！ 聖珠学園はこれで一回射精、もう後がありません！》

天井から吊り下げられた巨大な電光掲示板、そのうち「室戸冴香」と書かれた箇所には赤いランプが一つ灯る。

これはその選手が射精したことこの証であり、そして少女たちの命運があとわずかであることの証。

《さあ大変なことになってまいりました！ 世界選手権出場の切符をかけた第六十六回 F.T.B. 全国大会トーナメントその最終決戦！ 全国初出場ながらここまで駒を進めてきた私立聖珠学園の室戸・天音タッグ、強豪校、剛根学院相手に手も足もペニスも出ない！

三本勝負で二回射精すれば終わりのこの決勝戦、いよいよ追い込まれました！》

「下がって冴香！ あとは私がやるから！」

「美結さん……」

すでに大量に射精し戦えない冴香の代わりに、リングでは黒髪の少女が前に出た。

黒と赤のビキニスタイルのコスチューム、そのスカートからは冴香に勝るとも劣らない巨根が天を衝くように隆々と反り返ってまだ戦えるとはかりに戦闘態勢を整え勃起している。

《タッチ成功！ 室戸は下がり天音美結が聖珠学園の命運を背負って飛び出した！ しかしすでに一回射精している聖珠学園、彼女が落ちれば世界初進出の夢は途絶えます！》

実況の声が遠く感じる。

それほどまでに、目の前にそびえ立つ対戦相手の少女とそのペニスは美結に絶望的なまでの威圧感を放っていた。

喉が渇き、脚が震える。

世界への壁は、かくも高く分厚いのか。

どちらの選手も一切隙がなく、自分たちのここまでの懸命な攻撃でも全く射精に導けず。そればかりか、実力で言えば自分以上であるはずの冴香をあっさりと大量射精させて自

分たちを追いつ込んだ。

美結が唾を飲み込むと、眼前のふたなり少女は長い金髪をかき上げながら妖艶に笑う。

「フフフ……ここまで食らいついてきただけでも驚くべき健闘だけど、それもここまでね。あなたもすぐにあつちの子みたいに、無様に敗北射精させてあげるわ！」

「っ……」

確かに相手タッグは強大だ。

力も、速さも、そしてその股間の肉棒も自分たちより遥かに勝っている。

しかし、それでも。

自分たちは、諦められない。

「まだ……まだ私たちは負けてないっ！ 二人で約束したんだから……！」

長い黒髪を振り乱し、少女——美結は絶叫する。

目の前の相手に、後ろの相棒に、そして自分自身に言い聞かせるがごとく。

「絶対に、世界で戦うって！」

第1話 F T B 部

「天音美結です！ 体を動かすことが好きです！ この学園でみなさんと仲良くやっていけたらなっと思うので、よろしくしてやってくださいっ！」

用意してきたセリフを多少つかえながらも言い終え、クラスの少女たちに拍手で歓迎され、若い女性の担任に指示された空席に腰掛け、少女——天音美結は安堵の息を吐いた。私立聖珠学園。

ここは美結と同じ——両性具有、すなわちふたなりの少女のみが通う学園。生徒・教師は全員ふたなり、全員股間に男根を持つ。それがこの学園の入学・編入条件だ。

今まで美結は自分の身体にコンプレックスを抱いており、それゆえいじめ——とまではいかなかったが孤立しがちで。

そんな折にこの学園の存在をインターネットで知り、一念発起して上京、編入してきたのだ。

ここならば劣等感を抱くことなく学校生活を送れると美結は一念発起して単身上京し、

こうして転入生として迎えられた。

（この子も、あの子も……それにこの先生も……みんな私と同じふたなりで、ちんぽついでるんだよね）

これからクラスメイトとなる生徒たちをぐるりと見まわして、信じられないと言うように目を瞬かせる美結。

今までの世界には自分自身しかいなかった両性具有が、この教室という狭い空間だけで三十人。

学園全体で言えば七百人近いふたなりの少女が、ここにひしめいているのだ。
そんなことをぼんやりと考えていたら、ふと右隣から声がかかった。

「ねえねえ、天音さんだっけ？ どこから来たの？」

「えっ、ひゃい！」

突然かけられた陽気な声に驚き美結が振り向くと、そこには栗色の髪をした女の子がニコニコと笑顔を向けていた。もちろんふたなりだ。

「え、えっと……岐阜県のK市ってところから……」

「すごい！ めっちゃ遠くから来てんじゃない！ え、なに？ 地元^{みなぎしまい}にふたなり学校なかったからとかそういう理由で？ あ、あたし峰岸舞^{みなぎしまい}！ 分かんないことあったら何でも聞

いいいいよ！ その様子だと、ふたなりの友達とかも地元にはいなかった系？」

「う、うん……」

「なるほどねえー。それじゃあさっそく」

「え？ ……ひゃあっ！」

何か言っていた——と思う間もなく、隣の席の少女はおもむろに左手を美結のスカートへと伸ばしてきて。

手品のような早業で、スカートをめくり上げてショーツから美結の男性器をズルリと引きずり出してきた。

「うわ、でつか！ でつかあーっ！」

「ちょ、ちよつと……！」

巨根を目の前にした峰岸は歓喜に目をキラキラさせ、美結はあまりにも唐突な事態にスカートを下ろして隠すことも忘れて混乱する。

何の前触れもなく、自らのペニスを他人に見せてしまった。

今まではプールの授業も見学、林間学校も不参加と、あらゆる手段を尽くして隠してきた己のコンプレックスが、こんなにもあつさりと。

恥ずかしさと高揚感がみるみる加速していき、一瞬にして海綿体に血液が集まっていく。

（ひっ、だ、ダメ！ 勃起しないで！）

「わ、おつきくなってきた！ ってかすごっ……天音さん、これ何センチあるの？」

「に、二十六センチ、チ……」

ふたなりであること自体にコンプレックスを抱いていた美結だったが、この大きすぎる男根にも負い目を感じていた。

並の男よりも遥かに大きな——下手したら二倍以上の長さ太さを誇る己のペニス。

ふたなりの専門学園であつてもここまでのものを持つ生徒は少ないようで、周囲からの羨望のため息と「おつきい……」「いいなあ……」といった声が聞こえてくる。

（だ、ダメえ……ちんぽ見られちゃつて……いくらふたなり学園だからって、私初日にクラスのみんなにちんぽ見せて勃起しちやつて……）

異常ともいえる快感と興奮に、美結のペニスは収まることを知らず屹立し続ける。

「金玉もずっしりしてるし……これ相当精液出るんじゃない？ ってことで……」

「えっ、な、なにを？ やっ、やめ、ダメえええ！」

舌なめずりをした峰岸は、おもむろに美結の二十六センチのペニスを握ると激しく扱しごき始める。

（う、うそっ！ こんなところで、教室で、転校初日に！ 私、初対面の人にちんぽ扱かれ

てる、手コキされてるう！)

「ほらほら、イっちゃいなよ天音さん、転校生の射精見たいなあー」

「ダメえ！ と、止めてええ！ お願いいい！」

家族以外に見せることも、ましてや触らせることもなかった美結の男の部分。

それをこのたまたま隣の席にいたふたなり少女に露出させられ、あまつさえ片手で手コキされている。

(き、気持ちいい！ 気持ちいい……っ！)

オナニーなど比べ物にならない快感が、絶えずペニスから脳に送り込まれて射精願望が急速に膨らんでいく。

射精したい。今ここで思い切り精液を出して気持ちよくなりたい。

ダメだ。人前で、ましてや転校初日に射精など絶対にできない。

射精したい、ダメだ、射精したい、ダメだ――。

だがそんな葛藤も、峰岸の慣れた手コキの前には悲しいくらいに無意味で。

あつという間に理性は押し流され、欲望の濁流が射精管を上ってくる。

「ダメ、ダメダメダメえええ！ 出ちゃう出ちゃう精液出るううう！ らめえイクう、ちんぽイクうううううう――っ！」

「おー、出た出た出た」

悲鳴も空しく、峰岸の手コキにより美結はあっさりと絶頂を迎え。

その痙攣しながら果てる剛直から、教室の天井にまで届く白濁液がすさまじい勢いで放たれる。

「おおー。すごい飛ぶね天音さん。ちんぽもでかけりゃ射精量も半端ないし。こんだけ射精できるのクラスにいないんじゃない?」

「わ、分かったら手とめてええ! 精液止まんない、止まんないのおおお! んああああ出る出る出てるう、転校初日でクラスの前で精液おもしろい出してるのおおお!」

感心しつつも手の動きを止めない峰岸に、美結の射精は止まるどころかさらに加速して白濁を垂直に噴き上げていく。

あまりの出来事と快感に思考回路はとうに焼き切れ、ただされるがままに峰岸の手コキにより公開射精を続けてしまう。

天井にぶち当たって雨のように降ってくる自分の精液が顔と髪、そして新しい制服を余すところなく汚していく。

クラスメイトの少女たちが息を呑み、「すごい……」などと口々に呟き、中には携帯で

写真を撮り出す少女も何人かいた。

(らめえええ、見ないでえええ……射精見ないで……撮らないで、こんな転校初日で精液出してるはしたないと撮らないでえええ……)

精液は三十秒経っても噴出を止めず、一分近く経つてようやく収まり、ビクン、ビクンとペニスがわななき続ける。

「やっと止まった？　すごい射精だね、ふたなりでもこんだけ出せる子めったにいないよ。いやー、とんでもない逸材がやってきましたねえ？」

「は……はーっ、はーっ、ああ……」

(出しちゃったあ……転校して十五分で、初対面の子にちんぽしごかれてクラス全員に射精見せちゃったあ……)

感動したように目を輝かせる峰岸に、美結は荒い息を吐いて椅子にぐったりと身をもたれさせるので精いっぱいだ。

そんな時、一人の怒号で美結は現実に戻される。

「こらあ峰岸！　いくらなんでも授業始まってないうちから射精させるやつがあるか！」

「ひーっ、すいません先生、つい転校生ちんぽ味見したくて！」

「まったく……ほら雑巾！　さっさと拭かないと一時間目始まるだろう！」

怒った担任から雑巾を投げつけられ、峰岸はその場に屈んで美結の出した大量の精液を拭き取り始めた。

「あ……わ、わたしも……」

呆然と絶頂の余韻に浸っていた美結だったが、いくら理不尽に強制射精させられたからといって自分の出した精液を始末しないのも収まりが悪い。

そう思っ自分も雑巾を一枚手に取り、一リットルパックの牛乳をぶちまけたかのような床を峰岸と一緒に掃除することにした。

「いやーごめんね天音さん、あたし、ふたなりちんぽ見ると扱わずにはいられなくて」
「う、ううん……」

ちよつと髪を触ったくらい軽いノリで床を拭きながら謝ってくる少女に、美結は怒りや呆れよりも混乱に支配されていてそう返すのが精いっぱいだった。

（私、ここでやっていけるか不安だったけど……違う意味で不安になってきたなあ……）
男性器のせいで疎外され、ふたなりであることを必死に隠してきた美結のこれまでが、転入してわずか十五分で音を立てて崩壊していく。

これがふたなり専門学園なのかと、ひたすらにカルチャーショックを受けながらも自分の後始末をしていく美結。

そんな折、斜め後ろから椅子を引く音が聞こえ。

振り向くと、一人の少女が無言で雑巾を手に床掃除に加わっていた。

「あつ、ありがとう……っ」

礼を言おうとした美結は、そこで思わず言葉を失ってしまう。

（うわあ……すごい美人）

短くも美しい銀髪に、長いまつ毛と物憂げな眼、整った顔立ちにすらりとしたシルエツト。

神秘的ともいえる美少女が、無言で美結の出した精液を拭いていた。

そのさまに美結は雑巾を持つ手を思わず止めてしまい、じつとその少女を見て。

彼女もまた、美結の視線に気づいたようだった。

「……なにか？」

「あ、いや、その……ごめんね、ありがとう」

「いえ、私もこのくらい射精しますので」

まさか「つい見とれて」などとは言えずしどろもどろになる美結に、その銀髪美少女は顔色一つ変えずに平然と返して掃除を続行していく。

（ひええ……こんな綺麗な子もふたなりなんだ……ちんぽついてるんだ……というかほん

と申し訳ないなあ、私のせいで精液拭くの手伝ってもらっちゃって……」

銀髪美少女はそれ以上何も言わず、バケツを持ってきて雑巾を絞ると自分の席に戻り、何事もなかったかのように授業の準備を始めていた。

（ほんとすごいなあ、この学園……）

「おはよー！」

「あ、おはよー天音さん」

美結が聖珠学園に転入してから三日が過ぎた。

あまりにもオープンな性の環境に戸惑うことばかりだった美結だが、初日に声をかけてきてそのまま強制射精させてきた峰岸をはじめ、ふたなりの友人も多くできた。

教室に入り何人かの友人と挨拶をかわし、地元ではとてもありえないようなやり取りを聞き流しながら鞆を置いて席につく。

「やっぱいい、今朝寝坊して抜いてなくてさー」

「あ、じゃトイレいこ？ 手伝ったげるよ」

「この時間どこも抜いてる子でいっぱいじゃない？」

「別館の男子トイレならわりと……」

(……ほんと、みんなすごいなあ……ってか、友達同士で抜き合ったりするもんなんだね……？ 舞ちゃんなら頼んだらノリノリで抜いてくれそうだけど……い、いけない、考えたら勃起してきちゃった！)

なんとか性欲を抑えてしばらくしたところで、担任教師が入ってきてホームルームが始まり。

終わりに際に彼女は、美結の席にまで歩いてきて書類の束を手渡してきた。

「先生、これは？」

「部活の一覧表だ。まあ強制加入じゃないが、興味があるなら見ておけ」
ぶっきらぼうなふたなり女教師はそう言って、そのまま教室を出ていく。

「美結ちゃん、なんか入りたい部活あんの？」

「舞ちゃんは？」

「んー、帰宅部」

隣の席から峰岸が声をかけてきて、彼女と適当に会話しながらペラペラと資料をめくっていく美結。

ソフトボール部、バスケット部、吹奏楽部、剣道部、絵手紙部、茶道部――。
ふたなりの専門学園であっても、部活動自体は割と普通のようなのだ。

（ここに来る前は空手部だったけど……）

幼い頃から美結は空手に親しみ、これでも初段は持っている。

しかし身体の成長と共に著しく大きくなる男性器は少女を大いに悩ませ、道着で擦れるだけで勝手に勃起してしまうありさまで、稽古どころではなかったためそのまま空手はやめてしまった。

見たところ空手部はないようだが、よしんばあったとしても続けられないだろう。

文化系か、帰宅部か——。

（……ん？ F……TB……部？）

ふとそこで、見慣れない名称が一つ目に留まった。

一瞬^{マウンテンバイク}MTB部かと思ったが、どう見てもFTB部と書いてある。

「舞ちゃん、これなに？」

「ん？ あー、FTBかー。美結ちゃん割と向いてるかもね」

にゅつと顔を突き出して資料を覗き込む峰岸は、ああこれのことかと納得した表情を見せてから「FTBって知らない？」と問う。

こくと美結が頷くと、峰岸はあつさりと答えた。

「ふたなり・ちんぽ・バトル。略してFTB。ちんぽイカセ合って射精したら負けなやつ」

「へえー、ふたなりちんぽ……え……？」

それが、天音美結にとってFTBとの初めての出会いであり。

その時はまだ、自分がこの道に進むとは思ってもしなかった。

「ええええええええええ——!？」

昼休み、仲良くなった数人の友人たちと机を合わせて弁当を食べながら、美結はふたなり少女たちからそのFTBというものについての説明を受けていた。

ふたなりによる、ふたなりのための、誇りとプライドをかけたちんぽとちんぽの真剣勝負——それがFTB、ふたなりちんぽバトル。

言われてもピンと来ないのだが、とにかくふたなり同士でリングに上がって相手を射精へと導くことができれば勝利。

勝てばその場で、敗者に公開陵辱する権利が与えられる。

「つまり、勝っても負けても気持ちよくなっちゃうってところがいいよねっ！」

「そ……そうだね……」

指をビシッと立ててウインクしながら言う峰岸に、美結は汗を垂らして同意するほかなかった。

（でも、ふたなりだけに許された、誇りをかけた戦いかあ……）

弁当を口に運びつつ、美結はほんの少しF T Bに興味が湧いてきていた。

もともとふたなりのコンプレックスを解消するために、聖珠学園にやってきたのだ。

ここであらふたなりであること、男性器があることを隠さなくてもいいと考えて。

そうしたら、隠すどころか堂々と肉棒で戦う格闘技があると知り。

（ちよつと、やってみたいかも……）

などと、思っていた。

「ところで、うちのクラスでF T B部の人いたっけ？」

友人の一人が顎に人差し指を当てて天井を仰ぎつつ、思い出そうとするポーズをとっている。

「どうだろ？ 聖珠^{うち}、生徒数は多くてもF T B部はそんな強くなって規模もそんなでもなかった気が」

「やっぱ剛根学院とかだよ、強豪校っていえば。プロもだいたい剛根出身だし」
ペニスの生えた少女たちは口々に意見を交わし合い。

ふとそこで、思い出したように手をポンと打つ峰岸がいた。

「そうだ室戸さん！ 室戸さんF T B部じゃない？」

「むろ……とさん？」

美結は転校三日目で、まだクラスメイトの顔と名前が一致していない。

言われても誰だったか思い出せないのだが、峰岸は立ち上がって「おい！ 室戸さん！」と大声でその少女を呼び。

そうすると、少し離れた場所で黙々と一人でサンドイッチを食べていた少女がピクリと反応する。

「ねー、ちょっと美結ちゃんにさ、FTBのこと教えてあげてよ？」

「……………」

彼女は無言でこちらを向き。

（あっ！ あの綺麗な子じゃん！）

美結はハッと気づく。

三日前の転校初日、自分が峰岸に思い切り手コキで強制公開射精させられた時。

自分の斜め後ろに座っていた銀髪ショートヘアの寡黙な美少女が、無言で精液の始末を手伝ってくれたのだ。

（室戸さんって言うんだ……）

その室戸と呼ばれた銀髪美少女は、静かな足取りで自分たちの輪に近寄って、抑揚のな



い声で「なんでしょう」とだけ言う。

「室戸さんFTB部でしょ？ 美結ちゃん、ちょっと興味あるみたいでさ。いろいろ教えてあげてよ」

峰岸の促しに、室戸は座っている美結をじっと見下ろして。

少々の沈黙の後、淡々とこう言う。

「……やめたほうがいいですよ、天音さんは」

「えっ……」

美結も、峰岸も、他のふたなり少女たちも、氷のような一言に和やかな雰囲気打ち消されて沈黙してしまう。

大声で騒ぐので聞きたくもないのに聞こえてくるんですが、と前置きしてから室戸は言った。

「天音さん、FTBのことを知りもしなかったそうじゃないですか。そんな初心者以前の人がいきなりFTBを始めるなんて無理がありますよ。それに天音さん、初日に峰岸さんの手コキであっさり大量射精してましたよね。そんな我慢弱さでFTBができると本気で思っているんです？」

「ちょ……そんな言い方しなくても」

さすがにノリのいい峰岸も真面目なトーンになって銀髪の美少女を諫めようとするが、室戸は動じない。

「そんな初心者が来られても迷惑なだけです。F T Bはセックスじゃないんです、ちんぽ射精したいならご友人同士で乱交でもしてどうぞ」

「ちょ、ちよつと室戸さんっ！ 待つ……」

美結の声にも反応せず、もう話すことはないとばかりに教室を出てどこかへ行ってしまう室戸。

それからややあつて案の定、峰岸が金切り声を上げた。

「きー！ なにあの子超ムカつくー！ 元から話しづらいなと思つてたけどあんな露骨に言うことなくない？ 何様のつもりよほんとにもー！」

「い、いいよ舞ちゃん、私は別に気にしてないから」

机の上に乗って全身で怒りを表そうとする峰岸をなだめつつ、美結はぼんやりと思つていた。

（あそこまでかたくなな態度でいるってことは、室戸さんは相当F T Bに誇りを持つてるのかも……だって、ふたなりの誇りをかけて戦うってくらいだし……室戸さんにも、室戸さんなりの想いがあつたのかも）

まだ峰岸は怒っていたが、美結はこの時ますますFTBへの興味を、そして銀髪美少女の室戸への興味を抑えることができなかった。

放課後、掲示板に張られていた部活動新入部員の募集を美結は眺めていた。

そこには、多くの一般的な部活に混じってFTB部の募集もあり。

活動場所もそこに書いてあって、見学だけでもどうぞとある。どうやら本校舎を一度出た後、校庭を経た別館の地下に部室があるようだ。

一緒に帰ろうと言う峰岸たちの誘いを断って、美結は若干迷いながらも一人で別館地下へたどり着き。

「ここかあ……」

人気のない廊下、FTB部と書いてある部屋の扉の前に立っていた。

この中で、FTB部が活動している。

ペニスとペニスでイカせ合い、射精した方が負け――。

中でどのようなことが起こっているのか、想像もつかない。

何度もノックして入ってみようと試みるが、ここにきて緊張してしまいなかなか一歩が踏み出せない。

時間にして十分はそうしていただろうか、ふと横から声がかかった。

「……またあなたですか」

「ひゃっ！ あ……む、室戸さん……」

美結は電気ショックを浴びせられたかのようにその場で跳ね上がり、それから相手の顔を見て無意識に一步後ずさる。

昼休みにひと悶着あった、F T B部のクラスメイト、銀髪の美少女。

彼女が体操着袋を肩にかけ、扉の前で美結と相對している。

「い、今から部活……？」

「それ以外になにかあると？」

呆れたようにため息を一つ吐き、室戸は相変わらずの無抑揚な声で言った。

「やめた方がいいと言ったはずですが」

「う……そ、それは」

氷のような瞳。

昼休みのこともあって、冷徹で無感情な少女だという印象をどうしても受けてしまう。

（けど、室戸さん……初日に私の精液拭いてくれてたし、悪い人じゃないと思うんだよね）
あの日、彼女は自分や峰岸が頼んだわけでもないのに、自発的に精液掃除を手伝ってく

れたのだ。

どうしても美結は、室戸のことをただの非人情な少女だとは思えなかった。

銀髪美少女は淡々と、問い詰めるように言う。

「あなた、FTBが何か友人から聞いていますよね？」

「き、聞いているよ！ ちんぽイカセ合って射精した方が負けなんですよ!!」

「それを知って、早漏のあなたがやってみたいと？ 言っておきますが負けるとその場で公開陵辱されるんですよ。そういう願望でもあるんですか」

「わ……分かってるし、そんな気はないよっ」

敗者はリング上で、勝者に好きなだけ犯される。

そこに拒否権はなく、ただ為されるがままに。

ちなみに勝者がリングを降りた時点で敗者を犯せる権利は消滅するため、相手に敬意を払うタイプのちんぽファイターや接戦で自分もいっぱいいっぱいであった場合の選手はこの限りではないが――。

ただ、それでも。

美結は、FTBをもっと知りたいのだ。

「私、ちんぽについてるのがコンプレックスで、この学園に転校すればなにか変われると思っ

て……それで、ちんぽで戦うスポーツがあるって知ったら、どうしても気になって……」

室戸はじっと黙って、必死に言葉を紡ぐ少女を見ていた。

不器用で、それでも必死に。

今まで縁のなかったこの世界の門を叩こうとしている彼女を。

そして、三日前のことを思い出す。

（彼女の巨根、確かにF T Bで戦える素質はある……）

自分の斜め前の席に座ったと思ったら、信じられない勢いで白濁液を噴き出す美結の姿と、その太く逞しい肉棒を。

数多のふたりちんぽファイターと対戦を重ねて少女たちのペニスを見てきた室戸であっても、美結のそれは一線級の武器だった。

しかもF T B自体を知らない、一切鍛えていない原石のままの男性器であれだけ大きなとなればなおのこと。

（けれど早漏すぎます。あの我慢弱さでは新人戦の一回戦も無理……F T Bはスポーツやセックスのように甘くはありません。興味本位で足を踏み入れて再起不能になるちんぽファイターもいる……）

が、この少女は。

未経験にもかかわらず、真剣な面持ちでこちらの世界へ飛び込もうとしている。

「……………」

「む、室戸さん？」

「分かりました、見学くらいなら好きにしてください」

その言葉に、美結はパアッと顔を輝かせ。

室戸はもう一度ため息をつく、今まで美結が開けたくても開けられなかった引き戸を
こともなげに開けて部屋の中へ入っていく。

振り向いて、美結を促す。

「なにをしてるんです、見てみたいんじゃないんですか」

「あ、う、うんっ……」

言われるまま、美結も部屋へと一步を踏み出し。

その瞬間。

「んほおおおおお——！ おおっほおおお——っ！ 精液出る、出る、出るうううう！

また強制敗北射精しちゃうのおおお！ ちっ、ちんぽ、ちんぽおおお、ちんぽおおお

——っ！

「え……」

女の子の甲高い絶頂声と共に、美結の顔面に熱い何かが大量に飛んできた。

「んおおおおお——！ 真奈ちゃんそれダメ、それ反則なのおおおおお！ 後ろから

金玉揉み手コキらめええっへえええ！ 精液止まんない、女の子ザーメン止まんないのお

おおおお——！」

（熱っ！ な、なにこれ!!）

あまりのことに呆然として身動きもできないまま、絶えず顔に浴びせかけられる熱線のごとき白濁。

（せ、精液だ!）

それが部室中央のリングで絡み合っている二人の少女のうち、片方のペニスから噴射される精液であることによりやく気づく。

「ひ、ひいい——っ！」

慌てて——すでに手遅れだが——美結が身を屈めると、ビームのような精液は彼女の身体を通過して開けたままのドアから廊下へと波打ちながら飛んでいく。

「な、な、な……」

「まったく、この程度で驚いてるようではF T Bなんて務まりませんよ」

混乱する美結に、入室するなりサッと壁際に退避して精液砲撃を回避していた室戸はい

つものことだとばかりに平静な口調で少女を見下ろしている。

だが、部屋に入って一秒で精液を浴びせかけられて混乱しない方がおかしい。軽くパニックになる美結に、スッと室戸は手を伸ばして。

「立てますか？」

「……あ、ありがと……」

精液まみれになった美結は、半ば呆然としながらもその手を取って立ち上がる。

「ああ、はあ……もう、真奈ちゃんたら、後ろから金玉揉み手コキだけはダメって言ったじゃない……それされると私、射精確定なんだからあ……」

「ふっふーん、相手の弱点を突くのは基本中の基本なのでーす」

部室中央のリングではようやく射精が止まった少女がぐったりと倒れており、もう一人の小柄な女の子がガチガチに勃起させたままのペニスを強調するかのように腰を突き出して勝ち誇っている。

（ひええ……ほんとにちんぽイカセ合ってたんだ……）

他人の精液をボタボタと足下に垂らしながら、美結は呆然と立ちすくむ。

するとリングの少女二人はこちらに気づき、射精していなかった方の小柄な少女がロープをくぐってぴょんと跳び下り、勃起した男根が着地際にぶるんと揺れた。

「あ、冴香っちじゃんお疲れー。っとー、そっちの子は……もしかして新入部員!」

「見学です見学。どうしても言うので仕方なく」

期待に目をキラキラさせる少女——どう見ても子どもにしか見えない体型とそれに不釣り合いな男性器を持つ彼女に、室戸は首を振って否定する。

会話の態度からして、この小柄な少女は上級生のようだが、自分や室戸より背が低い上に顔立ちも幼い。

まじまじと美結が見ていたら、その少女はギロリと美結を睨み上げた。

「ちよつと、いま私のこと子どもだつて思ったでしょ! これでも三年生なんだかんね!」

「え? そ、そんなこと思っていないよ……じゃなくて、思つてませんよ!」

子どもにしか見えず思わずタメ口になつてしまい、慌てて訂正する美結。

その少女は金髪で、中途半端な長さのツインテールを無理やりドリル状にしたような髪型だ。胸は皆無と言つてもよいほど平坦で、それに比べて股間にそり立つそれは自分の二十六センチの巨根に迫るほど大きい。身長が低いぶん、余計に大きく見える。

(ちっちゃな体におつきなちゃんぽ……うっ、勃つてきちゃった……)

美結が思わず前かがみになつてスカートを押さえていると、リング上でぐったりしていたもう一人の少女も騒ぎに気づいて降りてくる。

自らの精液でドロドロになったまま、絶頂後で力が入らないのか転がるようにリングから降りてきたためにベチャツと粘性の高い音がして、それから文字通りズルズルと音を立てながらナメクジのように近づいてくる全裸の美少女。

「あらあ……？ あらあら……？」

（ひいっ！）

気だるげな表情と紫色でウェーブのかかった長い髪、全身精液まみれでテラテラと輝いている卑猥で豊満な肉体。

先ほどの少女とは真逆に、百センチを超えるかと思うほどの爆乳だった。美結も九十センチFカップとかなりの大きさなのだが、それを遥かにしのぐ質量。

股間の肉棒は先ほど大量に射精したこともあって萎えてはいたが、それでも十五センチを超える大きさのそれがぶら下がっていた。勃起すれば何センチになるというのか——先ほど射精していた時は遠目かつ一瞬だったため拝めなかったが、おそらく三十センチは超える大業物だろう。

「あなた、見ない顔ねえ……？」

「あ、あのっ、私F T B部に興味あつて、見学に」

緊張と恐怖でカチコチになりながら美結が答えると、ナメクジのような美少女はそこで

ふわあつと笑う。

「あらああああ……！ 嬉しいわあ、やつと二人目の新入部員さんが来てくれたのねえ？」

「い、いえ、ですから見学で……」

「いいのいいの、ゆっくりしていつてねえ？ あらあら、私の精液いっぱいかつちやつたわね、ごめんなさいねえ」

おっとりした口調の美女はいまだペニスから白濁液の残りを滴らせながら、ハンカチで美結の顔についた精液を拭い取った。

「今年は一年生の新入部員が冴香ちゃんだけで、このままじゃ廃部になっちゃうところだったのよお。もう一人来てくれてとつても嬉しいわあ」

「そうよ！ 今うち二年がいらないんだかね！ 来年どうなるのかなって思ってたんだから！」

本当にありがたそうに目を細めている彼女の笑顔を見ていたら、なんだか申し訳ない気分になってきた。

まだ見学だけで、本当にF T B部に入るかどうかは決めていないのだが。

「私はあ、一応部長さんやつてるう、ゆうづきゆかり夕月紫ですよ。よろしくねえ」

「すえじろう末藤真奈よ！ ちゃんと先輩って呼んでよね！」

「あ、天音美結です。転校してまだ三日目です、よろしくお願いします」

大柄でおっとりした部長こと夕月紫に、小柄で貧乳な金髪の三年生、末藤真奈。

この二人と室戸の三人だけが、今の聖珠学園FTB部員だという。

自己紹介を終えた二人の先輩が、さああなたの番よと言わんばかりにじっと室戸の方を見ている。

その視線に気づき、「同じクラスなんですが……」と室戸は呟いてから改めて名乗った。

「……室戸冴香です。一応ランク7でそこそこ協会には顔が利きます。よろしくどうぞ」

「う、うん、よろしくね」

（下の名前、冴香って言うんだ……クールな室戸さんにピッタリ……というか、ランク7ってなに？ ランクあるの？ 空手の段位みたいなものかな？）

関心と疑問に美結が包まれていると、横から小さい方の先輩の真奈が口を挟んできた。

「冴香っちはすごいんだよ。なんだって『あの』室戸流だかんね！」

自分のことのようにない胸を張ってふんぞり返る、小さな上級生。

「室戸流……？」

「知らないの？ FTB四大流派の一つで、ちょー名門なんだよ！ ちんぽファイターの常識だよ」

「F T Bのことを知らなかったんですから、室戸流のことも知ってるはずないでしょう」
呆れ気味に室戸は言う。

それから銀髪の美少女は、ぽかんとする美結に平淡な声で解説を始めた。

「いいですか――」

F T Bの歴史は古く、そもそもの起源は紀元前千五百年頃のエジプトにあったと言われている。

当時のF T Bは神聖な儀式であり敗者はその場で神への供物となり生贄に捧げられていたとされ、現代の「敗者は勝者に公開陵辱される」といったルールは、ここから来ているとされている。

その後F T Bは世界中に広まり、日本では飛鳥時代に仏教の伝来とともに持ち込まれたという説が最有力で当時は「魔羅闘まらとう」と呼ばれ、しばしば御前試合などで魔羅闘が行われていたと史料には残っている。

江戸時代中期に時の将軍により禁止され明治時代に復活するものの第二次世界大戦のありを受けて再び禁止となり、戦後にルールを世界規定に合わせ「F T B」として復活し現在に至る。

そして当時のF T Bを日本に持ち込んだ一人のちんぽファイターと日本人男性の間に生

まれた四つ子のふたなりが日本FTB四大流派の開祖と言われており、室戸流はそのうちの一派であると彼女は教えてくれた。

「——わかりましたか？」

「う、うん……」

長々と冴香は説明したが、美結の頭には半分も入ってこない。

覚えられたのはFTBの起源が古代エジプトだということと、室戸はFTBの名門出身ということだけだ。

「じゃあ、室戸さんはその室戸流の継承者的な感じなの？　すごいんだね！」

「……………」

手放して美結は彼女を褒めたつもりだったのだが、意に反してそこで沈黙してしまう室戸。

（あ、あれ？）

何かまずかったかな、と美結が思っていたら。

「……すみません、今日は体調が悪いのでこれで」

「ああつ、室戸さん！」

有無を言わさず銀髪美少女は踵きびすを返し、スタスタと歩いて部室から出ていってしまう。

（うわー……怒らせちゃったのかなあ）

自らの軽率な発言を後悔しても、本人はすでにいなくなってしまった。
気落ちしていると、背後から小さな上級生が慰めるように声をかける。

「冴香っちはね、家のことあんまりしゃべらないんだよ」

「末藤先輩」

私も前にそのことで冴香っちのこと怒らせちゃったんだ、と金髪貧乳ふたなり少女は言った。

そこに部長こと紫が続ける。

「そうなのよねえ。四大流派がなんでこんな弱小校にいるのかも、よく考えてみたらおかしい話だし。F T Bの名家はF T Bの名門校に無条件で入れるものだしねえ。まあ、ああいった家だから、跡取り問題みたいなのがあるのかしらあ？　うちに来てくれたのは嬉しいけど、魔部間際だし、なんだか才能の無駄遣いな気がして、ちよつともつたいないわよねえ」

（室戸さんは、室戸流の正式な継承者じゃない……？）

名家の跡取り問題などといった漫画のようなことが、身近で起きているらしい。
だが推し量る材料がなく、これ以上考えても無駄のようだ。

「それはそれとして、天音さん。どうかしらあ、FTB部に入らない？」

話を戻すかのように、紫がねっとりとした口調で誘ってくる。

「えっ……で、でも室戸さんがなんて言うか……」

「入る入らないは美結ちゃんの自由じゃん。やってみたって気持ちがあればそれで十分だよ」

一瞬室戸のことが頭をよぎったが、上級生たちは気にせず美結の意志を尊重する構えを見せている。

美結は考えた。

（FTB……ふたなり同士の誇りをかけた戦い……）

そこに本当に身を投じて、果たして良いのか。

自分はこの、女の身体にあるまじき大きすぎる男性器に悩まされてきた。

それだけにこれまでの反動もあり、胸の高鳴りを抑えきれない。

まだ、実際のFTBを見たわけでもないが。

そうしたら、実に便利な言葉が部長の口から零れ出た。

「仮入部でもいいのよお？」

仮性包茎の「仮」。その一字が入るだけで、ふっと気持ちが軽くなる。

（うん、やってみる！ ダメそうならやめればいいんだし！）
美結は決意して。

F T Bへの第一歩を、踏み出した。

「わかりました！ じゃあとりあえず仮入部で！」

「わああ。ようこそF T B部へー。歓迎するわあ」

「やったー！ これで部員四人！」

紫も真奈も、満面の笑みで美結を歓迎する。

「……あ、そういえば顧問の先生っているんですか？」

そこで、ふと美結は思った。

部活である以上は顧問がいるだろうから、挨拶はしておきたい。

すると、真奈と紫は首を振って順番に答える。

「んーん、今はいいない」

「^{かなき}神薙先生は今年の二月に海外出張に行っちゃってねえ。今このF T B部には顧問いないのよう」

「私たちはエンジョイ勢っていうか、大会に出るような実力でもなかったし、好きにやっ
てなっって言っってね。だからホントにフリーダムなんだよ。でも冴香っちもいるし、美結ち

んも入ったし、今年は大会に出られるかもね」

どうやら顧問は不在で、それゆえに自由な雰囲気らしい。

あまり厳しい顧問がいても困るし、この空気ならコンプレックスも忘れて楽しくやれそうだ。

こうして美結は、FTB部に仮入部することになった運びだが。

次の瞬間、二人のふたなり先輩から不穏な気配が漂い出し。

「それじゃあ早速……新入部員ちゃんには歓迎の意味でいっぱい気持ちよくなってもらわないとねえ？」

「ふふーん、先輩の命令には絶対従わないとダメなんだかんねー？」

（あ……これはアレだ……めちゃくちやちんぽ気持ちよくされちゃうやつ……）

美結は直感で危険を悟ったが、すでに遅く。

不気味な笑顔と共に迫ってきた二人の手によって、美結はあつという間に制服を脱がされ全裸にされてしまい。

「あらあ、初心者なのに立派なちんぽねえ」

「これはたつぷり精液出させてあげないと、ね」

「ひ……っ」

上級生はそれぞれのペニスを怒張させ、怯える小動物のような新入部員ににじり寄っていく。

白濁液にまみれた歓迎会は、帰りの電車がなくなる頃まで続いた――。

第2話 練習開始

(うう……眠い……結局昨日は三十五回も射精させられちゃった……)

転校四日目、昨日FTB部に仮入部した際の「歓迎会」と称した先輩二人の快樂責めに
より、足腰立たなくなるほどの身体に鞭を打って、美結はなんとか教室にまでたどり着く。
昨日はどうやって帰ってきたか記憶になく、家に着くなり疲労感と快樂の余韻で倒れ込
むように寝てしまった。

隣の席の峰岸が話しかけてくる内容もほとんど頭に入らず、ぐったりと机に突っ伏して。
いまだに下半身にうずくように残る快樂に身を任せていたら、不意にドンと机を叩く者
がいた。

「ふえっ!？」

驚いて美結が跳ね起きると、目の前には自分の机に手をついて立ったままこちらを睨む
ように見下ろしている銀髪の美少女。

「……あ、室戸さん……」

美結が仮入部したFTB部に所属しているふたなりちんぽファイター、室戸冴香がそこ

にいる。

「ちよつと来てください」

「え、なに？　ちよつ、ひゃああ！」

彼女はそう言うが早いのか、半ば強引に美結を立たせると。

ズルズルと引きずるように、有無を言わず彼女を女子トイレへと連れていく。

「先輩から聞きましたよ、あの後FTB部に入ってたっていうのは本当ですか」

「か、仮入部だよ」

個室に連れ込まれ、密室で顔を突きつけられて問い詰められる。

近くで見ると本当に綺麗だ——思わず美結はそんな感想を抱いたが、室戸冴香の表情は
厳しい。

「まったく、やめた方がいいと言ったのに……迷惑なんですよ、あなたみたいな初心者が
入部なんて」

「だ、だって先輩たちがいいって……それに、誰だって最初は初心者でしょ？」

至極まっとうな意見で美結は返すと、冴香は返答に困ったように沈黙して。

それから顔を離し、ため息をついてから言った。

「分かりました、ただし条件があります」

「じよ、条件？」

戸惑う美結に、冴香は平淡な声でその条件を告げる。

「ええー!! 新人戦で負けたら退部——!!」

放課後、FTB部室で室戸はその旨を二人の先輩にも話し、小さい方の三年生、末藤真奈は甲高い声で絶叫した。

一か月後のFTB新人戦シングルマッチ、そこで一勝すること。

「なんでそんなこと決めちゃうの冴香っちー! せっかく一年生もうひとり増えたのにー!」

「新人戦は一本勝負の勝ち抜きトーナメント戦で行われるのよお? つまり一回射精したら終わり、一回負けたらもうそこで終わりじゃない。ちよつと厳しいと思うわあ」

おっとりした大柄の部長、紫も頬に手を当て困ったように言う。

「それくらいの条件をクリアして頂かなくては、どのみち今後他の選手に潰されるだけです。初心者以前の天音さんが再起不能になるのを未然に防ぐ意味合いも兼ねていると思うてください。これは意地悪などではなくプロとして最低限の配慮です」

三年生相手にも動じず、平静に返す冴香。

幼い頃から家の名のもとFTBの修練を積んできた彼女にとって、自分の目の届く範囲で新人が潰れてしまうことは避けたいということらしい。

「もちろん右も左も分からない新人を放置などしません。これでもこの学園に入学する前は室戸流師範代、新人ちんぽファイターの育成指導など飽きるほどやってきました。私が直接ひと月指導すればよほどの強敵に当たらない限り新人戦の一回戦程度、誰でも勝てるように仕上げられます」

つまり、これからの指導に美結が一月ついてもらえるかどうかという、彼女の本気度を図ることが目的であり、勝利はその結果おのずとついてくるものに過ぎないと冴香は言った。

「むー……大丈夫かなあ」

真奈が心配するが、すでに美結は心が決まっていた。

室戸冴香は自分が本気であるか確かめようとしている。

本気でなければ許さないとばかりに。

それは冴香自身も、FTBにいつも本気で向かい合っていることの証拠でもあるのだ。

（室戸さんに私のFTBに対する想いをちゃんと見てもらって、それで新人戦で勝つ！）

「私やるよ！ 室戸さん、一か月よろしく！」

グッと拳を握り、美結は同学年のクラスメイトに頭を下げ、指導を乞う。
長い黒髪がばさりと落ち、冴香はその頭頂部をじつと見つめて。

「いいでしょう、下だけ脱いでリングに上がってきてください」

そう言つて、先に部室中央の闘技場へと上がっていく。

美結もバツと頭を上げ、迷うことなくスカートとショーツを脱ぎ捨てて。

二十六センチの巨根を揺らし、冴香と反対側からリングへと上がる。

そこで美結が見たものは、下半身を露出させた室戸冴香の肢体と、そしてその股間に雄々しくもそびえ立つ、細い身体に似合わない勃起した男の象徴――。

その威容に、美結は思わず口元を押さえて息を呑む。

（は、初めて見た……室戸さんのちんぽ……）

大きい。部長のものほどではないが、三十センチを優に超える大きさと十分な太さ。

それでいながらしなやかな曲線を描き、まさに徹底的に鍛え抜かれた切れ味鋭い名刀のようなペニスだった。

そしてその先端は意外にも包皮で覆われており、亀頭も見えない真性包茎――。

（すごく綺麗……それに、皮かぶってるんだ……）

「なんです、人のちんぽじろじろと」

「あ、ご、ごめん……綺麗だなんて思つて」

「はあ……お世辞など結構です。始めますよ」

美結の賞賛にも、冴香はノーリアクションで返す。

彼女にとってペニスを褒められることなど慣れっこなのだろうか、一切の浮かれが感じられない。

改めて美結が冴香に向き合うと、そこで銀髪美少女は説明を始めた。

「まず、先ほど部長も言っていたように新人戦シングルマッチのルールは一本勝負。すなわち一回射精してしまえば即負けということですよ」

一度のミスも許されない、それこそ一発勝負。

美結は唾を呑み込んだ。

「逆に言えば射精さえしなければ勝てるとも言えるわけです。しかしながら今の天音さんはとにかく早漏で、これをなんとかしない限り勝機はありません。ですので天音さんにはこれから、ちんぼ耐久力の強化を重点的に、基礎体力トレーニング、射精テクニックの練習などを織り交ぜたメニューを一か月後の新人戦までに基本毎日こなしてもらいます。いいですね」

「う、うん！」

聞くだけで頭がおかしくなりそうな単語が次々と出てくるのだが、これこそFTBの世界なのだと美結は感じ、自ずとペニスにも力が入る。

「家でもできる早漏改善トレーニング法も昼休みにパソコン室で刷っておきましたので、それは帰宅後寝る前にでもやっていただくとして、とりあえず今は――」

「え……」

フツ、と眼前の冴香の姿が消えて。

次の瞬間、美結のペニスはひんやりとした何かに握られる。

（速……っ！）

「どれほどまでに早漏なのか、私自身の目と手で確かめさせてもらいます」

瞬間移動のような速さで背後に回って男性器を握ってきた冴香に、美結は戸惑うことすら許されず。

冴香の小さな右手が美結の二十六センチの肉棒を、高速で扱きあげる。

（あ、ああつ、室戸さんの手……！　ちっちゃくて、ひんやりして、すべすべのふにふに
でえ……！　これが今までたくさんの選手をイカせてきた室戸さんの手コキ……！）

昨日の歓迎会でも、真奈と紫に手コキだけで十回は強制射精させられた。

しかし、四大流派の手コキは彼女らと一線を画す半端ではない技量。

ひと扱きごとに動きを微妙に変え、指先に至るまで一切の無駄な力が入っておらず、機械のような正確さで一瞬にして美結を絶頂間際まで導く。

そうしながら、冴香は美結の耳元で囁くように解説を始める。

「FTBで最も基本的な戦術が手コキです。挿入や逆挿入、兜合わせなどは相手に与える快楽こそ大きいですが、自分のちんぽにも刺激が及ぶ諸刃の剣。しかし手コキはデメリットなしで相手にのみ快感を与えるうえ、パイズリと違って誰でもできるため、最もオーソドックスな攻撃として初心者から玄人まで幅広く用いてくる戦術で、当然ながら対策必須です」

「ひ、ひああ、手、手え止めてええええ……ダメそれ、よすぎつ、気持ち良すぎいいい……!!」

後ろから正確無比な手コキ、耳元では冴香による無感情ながらもどこか艶っぽい囁きが美結をどんどん追い詰めて理性の壁を削り取る。

全く身動きがとれない。

冴香の手コキが強力かつ甘美すぎて、全身に力が入らず抜け出そうと思っても抜け出せない。

そしてそのまま、必死の抵抗も空しく。

「んああああ——っ！ ちんぽ、ちんぽイクうううう！ 出る、出る、出るううう！ 金玉汁いっぱい出ひゃうのおおお！ おほおおお、室戸ひゃんの手コキ強すぎるいい——！」

絶叫と共に身体を仰け反らせ、巨根から敗北の証である白濁液を盛大に噴き上げる。

「もう射精ですか。三十秒持たないとはとんだ早漏新人ちんぽファイターですね、先が思いやられますよ」

「無理無理ムリムリ無理いいいいっ！ こんな耐えられない、プロの手コキすごいひいいい——っ！ 室戸ちゃん手え止めてええ、精液止まんない、止まんないのおおお——っ！」

「まったくだらしなないちんぽですね、そんな体たらくでFTBに出るつもりですか。ほら全部出してください、大きいだけで根性のかけらもない貧弱早漏ちんぽから精液を一滴残らず情けなく」

呆れつつも手コキをやめない冴香に、美結のペニスは壊れたように精液を噴き上げ続け、たっぷり一分が経過した頃によりやくビク、ビクと大きく波打って最後の一滴を放ったのちにぐったりと萎え、同時に美結自身もリングに崩れ落ちた。

「まあ、予想通りの早さでしたね」



「はー……はー……すごい……こんなの……はじめてえええ……」

全身を痙攣させながらマットに沈む美結を、逸物を勃起させたまま冴香は見下ろし、氷のように冷たい声をかける。

「ほら勃ってください、指導はまだ始まったばかりですよ。それとも今すぐ退部しますか」

「や……やだぁ……退部しない……わたし、FTBやりたいんだからぁ……」

「……その気概は結構、なら続けますよ」

必死に立ち上がり勃ち上がってきた美結に襲い掛かってきたのは、執拗なまでのさらなる冴香の手コキ。

「お、おほおっ！ い、今すぐはダメ、いったばかりで敏か……んああああ出る出る出る、二回目早漏射精来ちゃううう！ 初心者敏感ちんぽイクううう——っ！」

結局美結はその日、冴香の容赦のない手コキによって二十回以上の強制射精をさせられ、夜八時によりやく解放され、精液まみれのリングに倒れ込んだ。

「今日は初日ですし、軽めにこのくらいで上がりましょうか。明日から1.5倍の練習量ですからね、精液溜めてまた放課後来てください」

「ああ……ああ……すごい……ちんぽお……こわれちゃう……」

うわごとのように呟く美結をその場に残し、冴香はサッと身なりを整えるとスカートを

穿いて部室を出ていく。

あとに残された白濁まみれの美結に、特訓の様子を見守っていた二人の上級生が心配そうに声をかける。

「大変ねえ美結ちゃん。大丈夫？」

「あ……せんぱい……はい、らいじょうぶです……」

快樂地獄から這い出せずまだ呂律の回っていない美結に、真奈が肩を貸して立ち上がった。

「冴香つちがあんなに容赦なく搾り取ってくるとこ初めて見たよ。ちよつとひどいんじゃないかなあ。やっぱり、美結ちゃんのこと退部させたくてわざとあんな激しくやってるんじゃない……」

「それは違うわよお、真奈ちゃん」

眉をひそめる真奈の反対側から肩を貸す部長の紫が、ゆるゆると首を横に振ってからおっとりとした口調で言った。

「冴香ちゃんも本気なのよう、本気でFTBの舞台に立ちたいって言った美結ちゃんの想いに応えるために、冴香ちゃんも本気で指導してくれてるのよう」

「そ……そーいうもんなの？」

「あんな態度だから誤解されちゃうけどねえ。そもそも本当に退部させたいなら、指導なんて買って出ないでしょうしい？」

新人戦シングルマッチ——天音美結のデビュー戦まで、あと二十六日。

「あはあああ——っ！ ダメダメダメ、イクイク、精液出ちゃう、男の子のミルクいっぱい出しちゃううううう——！」

美結が冴香に直接F T Bの指導を受けるようになってから、およそ半月が過ぎた。

この日十回目となる大量の白濁汁を噴き上げ、美結はリングに崩れ落ちる。

倒れてからもまだドクドクと男のエキスを漏らし続ける少女を見下ろし、冴香はふうと息をついて言った。

「最初のころに比べればマシになりましたが、まだ我慢強さが足りていませんね。まあ計画に支障をきたすほどではない……家で早漏改善トレーニングも一応はやっているようで、その勤勉さは評価に値します」

「は、はひい……まだ出てるう……女の子精液止まらないのお……」

混濁する意識の中、冴香の言葉に必死で頷く美結。

ここ半月、ほぼ毎日放課後は部室で練習、冴香のテクニクに耐えて射精を我慢するト

レーニングを中心に、基礎体力作りに射精テクニクの練習など、ハードなメニューを今のところは順調にこなせている。

「お疲れー。ちょっと休憩しよ、二人とも」

「そうですね、この辺で」

小柄で貧乳の中途半端なドリルツインテールの三年生、末藤真奈に声をかけられ冴香はリングから降りて自分のペットボトルに口をつけた。

美結も射精の余韻と脱力感を振り切り、フラフラと立ち上がってペニスを拭きつつリングから降り、タオルで体中を拭いて水分を摂取する。

「どうかしらあ冴香ちゃん、美結ちゃんの様子は」

「空手をやっていただけあつて体はある程度作れていますね。瞬発力、ちんぽ攻撃力は高い水準にあると思います。長所の伸びはよく、これまでの指導に耐えられるだけの精神的強さもあります」

手元のバインダーに記録していた美結のこれまでのデータを見つつ、冴香は部長——紫の問いに淡々と答えていく。

「ただやはり致命的とも言えるちんぽ耐久力については課題が残ります。ここまではカリキュラム通りですが、あと半月の期間で伸びが悪くなると試合が心配ですね」

美結たちが剛根の試合を観戦していたように、彼女らも聖珠学園の試合を見て対策を練

が、その必要もなかったとばかりに剛羅流次期当主は鼻で笑い。

そうして、過去の冴香を脳裏に描きながら思う。

（室戸流の……弱くなったものだ。かつては氷の修羅とさえ呼ばれ数多のちんぽファイターを震え上がらせた貴様が、あの程度の相手に軽々しく奥義を披露するなど。しかもその奥義の威力も、思ったほどのものでもないといくれば）

「我ら剛根の勝ち揺るがん。決勝もつまらんものになりそうだ」

ザッ、と踵を返して、剛羅はリングから離れて歩き出す。

んはああああ——！

ダメダメダメ、ちんぽちんぽちんぽい　　うううううううう

《イット——！ 二回目の射精だ——！》
媚夢学園の北条亜理紗、背後に回られた天音に

よる九十センチの豊満なバストを背中に押し付けられながらの金玉揉み手コキで三十秒持たず、二発目となる白濁液を高く高く噴き上げております!」

三回戦となる、媚夢学園戦。

ここまでの二戦を勝ち上がってきた相手だからどの程度かと思えば、ちんぽ攻撃力もテクニクも低い二人は美結と冴香にそれぞれ一回ずつ射精させられ、早くも勝利にリーチがかかった。

（運だけで勝ってきたような相手ですね。私たちタッグの前には通用しません）

コーナーから試合運びを見ていた冴香も、自分たちの勝利を確信していた。

ここまでの三戦、自分たちはまだ一度も射精していない。

まさに快進撃といった勢いだ。

「よしっ、これであと一回イカせられれば!」

レフェリーに引き離された美結はニュートラルコーナーで呼吸を整えつつ、入れ替わりで出てくる相手校の選手を待つ。

射精した少女は自軍のコーナーに引込み、控えの少女と何やら話している。

「やっぱりまともに戦って勝てる相手じゃないわ……アレを使うのよ」

「……そうね、アレしかないわ」

(アレとは……?)

彼女らの会話を、冴香の耳は拾っていた。

何かよからぬことを企んでいるらしい。

反則行為は五カウントで負けだが、逆に言えば四カウントまでなら許されるということ。追い詰められた相手が最後のあがきに何をしてくるか、油断はならない。

「よし、このまま一気にっ!」

「美結さん、ダメです!」

が、美結は彼女らの会話が聞こえていなかったのか、出てきた相手校の選手にタックルを仕掛けて転倒させ、そのまま少女の下半身に覆いかぶさった。

《おーっと北条に代わって出てきた娯夢学園の石川^{いしかわ}麻友^{まゆ}、あっさりと天音に倒されて男根を啜えられた——! このままフェラで三回目となる敗北射精か——!》

「んむっ、じゅぷぷっ……ほら、気持ちいい? 気持ちいいミルクいっぱい出せるよ? 最高の敗北射精のお手伝いしてあげるから……」

一気に口で射精させようと、勢いをつけた前後運動で石川のペニスに刺激を与えていく美結だ。

「フフ……かかったわね!」

それを待っていたかのように、石川は脚で美結の身体をガッチリと捕まえた。

《あぁと!? 天音の口まんに囚われた絶体絶命の石川、ここで自ら脚で天音の身体をホールドしました! これはどういった戦略なのか!》

逃げなければ敗北射精してしまう状況下、逆に美結の身体を掬め捕る石川麻友。

今現在も彼女の男性器は、美結の口によって甘く激しい刺激を与えられているのにもかわらずだ。

(いけません、やはり何かしようとしています!)

《室戸が危機を察知して助けに入った! しかし間に合うのか!》

「無理よ、この距離では逃げられないわ! 食らいなさい!」

そう言つて石川は、美結を捕まえたままリングコスチュームの懷から何かを取り出して。
(スマホ……?)

「美結さん!」

取り出された薄くて小さな液晶画面から、サイケデリックな色合いの怪光線が放たれ。

美結を突き飛ばす形で彼女をかばってその光をまともに見てしまった冴香は、その場でぺたんと崩れ落ちた。

《おあああ——つと、これはいったい何が起きた! 天音をかばって妖しい光線を浴びた

室戸、糸の切れたマリオネットのように崩れ落ちた！ これは反則ではないのか！ レフエリーは相方の北条と何やら揉めていて暴拳に気づいていません！』

「さ、冴香!? どうしたの？」

脚絡めから解放された美結が這いよって声をかけるが、冴香はぼんやりとあらぬ方向を見て思考停止している。

まるで中身がどこかへ行ってしまった、ここにいるのは抜け殻であるかのようだ。

「あ、あなた！ 冴香に何したの!？」

驚きと不安と怒りをなймаぜにして美結は相手校に問い詰めるが、敵ちゃんぽファイターたちは余裕の笑みを崩さない。

「フフ……すぐに分かるわ」

「我が校の科学部が作り出した、最新鋭の催眠アプリのね！」

（催眠……アプリ!?）

美結が考えようとした瞬間、横で相方の少女がゆらりと立ち上がった。

「冴香！ 大丈夫!？」

「……………」

声をかけるが、銀髪の着物美少女は何も返答しない。

ぎごちない動きで美結に向き合うと、次の瞬間両手で相棒を突き飛ばして尻もちをつか
せた。

「きゃっ！ さ、冴香なにして……」

「みゆ……さん……」

そしてそのまま、スルスルと美結の身体にのしかかっていき。

彼女のスカートからのぞく二十六センチのペニスに、何のためらいもなくむしゃぶりつ
いた。

「な、さ、冴香っ！ 何してるの!? 冴香！」

《これはいったい何事か！ 室戸冴香、味方であるはずの天音のちんぽを咥え込みフェラ
を始めてしまった——！ いきなりどうしてしまったのでしょうか、FTBにおいて自ら
の首を絞めるだけの味方への快楽攻撃！ 何を、何を考えているのか！》

「冴香っ……ひいんっ、ダメえ……ちんぽしゃぶるのダメ、やめてえ気持ちよくなっちゃ
う、ちんぽ気持ちよくなっちゃうよお……」

（どうして、どうしてなの!? なんで急に私のちんぽしゃぶり始めちゃったの!?）

混乱に快楽が上乘せされ、美結の思考力は著しく低下していく。

そしてその中で、一つの仮説に至る。

（まさか、催眠アプリってそういう……！）

催眠と言うのだから眠らせるのかと思っていたが、よもや冴香の自我を奪い操り人形と
してしまうのか、と。

「フッフ、今ごろ気づいてももう遅いわ！ 天音さん、あなたは味方にイカされてちんぽ
から敗北精液びゅーびゅー出しちゃうのよ！」

「そ、そんな……！ あはあああつ、ちんぽおおお！」

相手校の北条が得意げな顔で言つてのけ、美結は絶望しそれもすぐさま快樂に置き換え
られる。

（さ、冴香は操られて私のちんぽしゃぶらされてるんだ……なんとかしないと、このまま
じゃ射精しちゃうっ……）

《これは明らかな反則行為であります！ 今大会では武器や凶器、および性感を高めるた
めのアイテムの持ち込みは禁止されている！ 催眠アプリはこれらに含まれませんが事実
上同様のアイテムと見ていいでしょう、あーつとさすがにレフェリーがカウントを取って
おります！》

リング上では冴香に怪光線を浴びせた石川に、レフェリーが反則のカウントを取ってい
る。

しかし。

「そうね、アイテムの持ち込みは禁止だったわね。なら……こうよ！」

《あ——つ石川、携帯をリング外へ投げ捨てた——！　これではアイテムを持ち込んでいないということになってしまう！　反則カウントが四で止まってしまいました！　続行、続行です！》

「そ、そんなあ……！　こんなのおかしいっ……いやあああちんぽ、ちんぽおおお——！　冴香、やめて、ちんぽ気持ちよくするのやめてえええええ——！」

反則カウントが止まってしまった以上、試合は続行されるのみ。

さすがに観客も四方から娯夢学園の卑劣な行いにブーイングの嵐だが、相手二人は気にも留めていない。

さらに携帯を捨ててもまだ催眠の効果は残っているらしく、冴香は正気を失った瞳で美結の巨根を咥え込み、舐め上げ、亀頭を手のひらで擦り上げ、正確かつ丹念な技巧で射精させようとしてくる。

「さ、冴香、しっかりして！　正気に戻ってよお！」

「何を言っているんれす？　私は正気ですよ、んちゅっ……正気で美結さんのおつきなちんぽ、イかせたいと思ってるんれす。早く精液出してくらはい、じゅるるるっ」

美結の言葉に冴香はようやく答えたが、明らかに正気でない声色でひたすら快樂攻撃を続けてくる。

（ひ、ひどい！ 完全に催眠アプリで操られちゃってる！）

どうにかして催眠を解除して冴香を正気に戻さねば、このまま同士討ち射精させられてしまう。

射精したら負けに直結するFTBにおいて、味方同士で快感を与え合って射精してしまうほど無意味な行動はない。

「美結さんのちんぽ、おいひい……はむっ、んじゅるるっ、んぷちゅ……っ、ずっと美結さんのちんぽしゃぶって、まっしろな敗北精液いっぱい出させたいって思ってたんれす……」

「そ、それは練習でさんざん……はっ、はああんっ！ あっ、あはあっ、はああああんっ！ ちんぽおおお、ちんぽしゃぶられてっ、洗脳冴香にちんぽしゃぶられて気持ちいいのおおお！ ダメ、ダメ、イクイクイク、ちんぽイっちゃううう……！」

《天音、味方に襲われて絶体絶命のピンチだ——！ このまま射精してしまうのか

——！》

会場のファンたちも、必死に耐える美結に声援を送っている。

相手の二人は射精後の余韻から完全に回復してしまい、ニヤニヤ笑って自分たちの共食い行為を眺めている。

そして、ついに。

「ああっはあああああ——！ ちんぽおおお！ ちんぽおお——！ 射精、射精つ、射精きたあああああ——！ この大会で初めての敗北射精きったあああああ——！」

——！ 気持ちいいつ、気持ちいいつ、精液出すの気持ちいいよおおお——！」

《ダメだ——！ 天音美結、味方の室戸によって自殺点射精だ——！ 室戸流の性技をまともに受けて為す術もなく大量の白濁液が噴き上がる——！》

ファンからの悲鳴が上がり、電光掲示板には美結の名前の横に赤いランプが一つ灯つてしまう。

これで一回射精、あと二回射精してしまえば自分たちの逆転負けだ。

「さえかああああ——！ お願い冴香、正気に戻ってえええ——！ おほおおおおちんぽちんぽちんぽ、味方にイカされるの気持ちいいつ、大切なパートナーに射精させてもらうのすごく気持ちいいのおお！ こんな射精したくなかったのにつ、こんな射精したくないのにすごい気持ちいいいいいい！ オウンゴールミルク気持ちいい——！」

「美結ちゃん、すてきれす……みゆちゃんの敗北しゃせい、リングでのみつともない無様

な射精、私ずっと見たかったです……ほんとはずっとずっと私の手で美結さんのこと試合でイかせたくて……でも味方だからできなくて……だから今こうして射精させられて本当に幸せれす……」

エメラルドの瞳は光を失い、うつろな緑暗色に沈んでいる。

その死んだような目で、着物コスチュームを淫らに崩しながら美結の身体に覆いかぶさり、甘い吐息が亀頭にかかって美結はさらに興奮する。

「冴香、あなた操られてるのっ、そんなことほんとの冴香は思っていないのぉおお！ こ、こんな状況でえええ……！ こんな状況でも見境なく射精しちゃう私のちんぽはしたくないよぉ……おほああああちんぽおお——！ 味方にちんぽイカされてフレンドリーザーメンファイアするの最高らよおおお——！」

《精液が止まらない！ 天音、自慢の巨根から大量の敗北ミルクをまき散らしております！ 敵にイカされるならまだしも、味方によって射精してしまうとはなんたる無念！ それもよりによって室戸流の性技で絶頂してしまった——！ 味方にすれば頼もしい彼女が敵に回った時の恐ろしさ、それはこの精液の量、そしてもはや固体ともいえるその濃さを見れば明らかであります！》

「ああああちんぽおおお——！ ゆるしやない、ゆるしやないのぉおお！ わた

ひと冴香の絆を断ち切って同士討ち射精させたあんたたちのこと、ぜったいぜったいゆるしやないんだからああああ——！」

「そんなにみつともなく射精しながら何言ってるのかしら、味方にイカされて精液出してる天音さん？」

「フフフ、これでもう終わりね聖珠も」

広範囲に大量射精しつつ、焦点の定まらない目で媚夢学園の二人を睨んで呂律の回らないまま叫ぶ美結だが、当然怖さも威圧感もあったものではなく、むしろ二人に鼻で笑われる始末。

屈辱この上ない。

「ちんぽちんぽ、ちんぽおおおおお——！ さえかおねがいつ、ちんぽから離れてえ、イキ続けてるちんぽしやぶって精液の勢い強くしないれえええ！」

（ほおおっ、ほおおおおお、ちんぽ、ちんぽおおお……待ってて冴香、絶対正氣に戻してあげるから……そしてそのあとはあの二人を射精させて、お仕置きの公開陵辱してあげるんだからあ……っ）

快感と恥辱に顔を真っ赤に染めつつ、美結ははまだドクドクと射精しながら反撃の機を窺う。

《聖珠サイド、大混乱に陥っております！ 相手校の持ち出した催眠アプリにかかってしまった室戸冴香、正気を失って味方の天音に襲い掛かり自殺点射精させてしまいました！これで一对二、圧倒的優位だった聖珠がよりによって内部崩壊しようとしている！》

敵の卑劣な罠にかかり完全に理性と自我を失った冴香は美結の下半身にのしかかり、手と口と舌で美結の射精し続けるペニスを執拗に愛撫して精液の勢いをけしかけている。

このままでは美結は勃起できなくなり、試合から脱落してしまう。

そうなたら射精回数がまだ残されていても、敗北待ったなしだ。

「ダメダメダメダメええええ！ もうやめて冴香、ちんぽこれ以上気持ちよくしないれええええ！」

（な、なんとかして、なんとかして冴香の催眠を解かないとっ……ほんとに負けちゃうよお……！）

すでに五分近く美結は精液を会場にまき散らし、リング周囲前列から中列までの観客は彼女の精液を一人残らず浴びて大満足げだ。

だが美結本人は最高の快楽を享受しつつも、こんなところで敗退射精するわけにはいかないというちんぽファイターとしての矜持がまだ残っている。

相手はすでに二回射精しており、この状況を乗り越えれば勝てるのだ。

（も、もう、こうなったら！ 冴香、ごめんっ！）

《あーっと天音、射精しながら掌底で室戸を突き飛ばした！ 室戸、マットをゴロゴロ転がってコーナーポストに激突してそのままダウン！ 今ようやく味方からの快樂攻撃から解放された天音ですが状況は非常に不利です、レフェリーが彼女のちんぽチェックを行っております！》

「は、はあ……はあ……ほら見てレフェリー、私のちんぽ見てえ！ 精液まみれでいやらしく勃起してる私のちんぽしつかり見てええ！ まだ勃起してるから！ まだやれるからっ！」

「OK天音、試合続行！」

レフェリーの眼前に己の武器を堂々と見せつけ、試合続行の意思があることをこれでもかとアピールする。美結の闘志はしつかりと彼に伝わった。

《続行、続行です！ まだ彼女の闘志と男根は折れておりません！ 洗脳された室戸はダウンしましたがこれでなんとか一対二、先ほどよりは好転したと言えるでしょう、しかし大量射精で敏感になったペニスはいきやすくなっております、ここが天音の正念場だ！》

「絶対に許さないからね！ いっくよー！」

肉棒をぶるんと揺らしながら、美結は催眠をかけた張本人である石川麻友に狙いを絞って突っこんでいく。

相手そのものは強くもなんともなく、反則手段に頼らないと勝てないちんぽファイターだ。

現に自分の力量でも、すでに一回難なく射精に持つていけている。

が――。

「おっと、私たちにかまけていいのかしら？」

「後ろを見てごらん、天音さん」

彼女らは余裕の笑みを消さず、美結の背後にいる冴香を指さして。

振り向くと、そこには掌底で突き飛ばされた冴香がぼんやりとした表情で立ち上がっている。

「――室戸冴香、オナニーしなさい」

「っ！」

その意思を持たない冴香に、北条亜理紗の命令が飛ぶと。

銀髪の美少女はコーナーポストにもたれかかったまま、自らの肉棒をズルリと取り出してその場で抜き始めた。

「さ、冴香っ!？」

「は……はあっ……ちんぽ、ちんぽ気持ちいい……リングでちんぽオナニーするの気持ちいいですっ……」

《なんとこれは! 室戸、気絶から復活したかと思えばコーナーで自慰にふけり始めた! 自らの三十二センチ包茎ペニスを扱きながら、美貌をだらしなく緩ませて数万の観客の前で公開オナニーショーを開催している——!》

(催眠の効果がまだ残ってるんだ!)

愕然とする美結に、媚夢学園の二人はさらに絶望的な言葉を口にする。

「さあ、分かるわよね天音さん? 『射精しろ』って命令されなくなかったら、どうすればいいか」

「く……っ、卑怯だよっ! それでもちんぽファイターなの!？」

「卑怯なんてのは負けるほうの言い訳なのよ。さあ室戸さんに射精してほしくなかったら、両手を頭の上においてガニ股ポーズでちんぽ突き出さない」

あまりの悪辣非道ぶりに美結も怒るが、冴香を人質に取られてはどうしようもない。

相手に命令されるがまま、リング中央で腰を落としてペニスを突き出して自分から奉仕をねだるというちんぽファイターとして最低の格好をしてしまう。

《卑劣——！　こんなことがあつていいのでしょうか、天音、室戸を人質に取られて動けない——！　打つ手がなくなつた天音のペニスを、北条亜理紗がねちっこく舐め上げていく！　天音無抵抗だ、女の子なのに足をいやらしく広げたみつともないポーズでされるがまま、どうしようもありません！》

「くっ、んううっ……ち、ちんぽ、ちんぽぺろぺろしないれえ……」

無理な体勢、屈辱、そして快楽により足を震わせながら、美結は必死に恥ずかしいポーズを維持しつつ口技に耐える。

（さ、冴香の洗脳は時間で解けるかもしれないからっ……それまで私が我慢していれば、洗脳の切れた冴香が助けてくれるからあ……！　だからこうしてガニ股でちんぽ突き出して自分からフェラしてもらうのだって仕方ないっ、仕方ないのお……！）

だが、そんな美結の必死で健気な思ひはあつさりと打ち砕かれ。

冴香は美結の後ろで、あつさりと自ら果てて精液をぶちまけてしまう。

「ああっはああああ——！　ちんぽお、ちんぽおお！　リング上で公開オナニー射精気持ちはいいいいいい——！　見て、見てええええ！　私の射精見てええええ！　神聖なリングでオナニーして射精する背徳感と解放感がすごいのお、よりによってFTB四大流派がリングでオナニーするっていう絶対にやっちゃいけないことやつてるのおおお——！



ああっはあああちんぽちんぽちんぽ、ちんぽ、ちんぽ、ちんぽイっくうううう——！　オナニー精液大量にでてりゅううううう——！」

《だ——！　室戸、オナニーで自ら大量の敗北射精——！　ちんぽファイターとして、F TBを牽引する四大流派として、最もあつてはならない行為に及んでいる！　これはいけません、あまりの大量射精、あまりの快感だ！　聖珠学園これで二回射精、圧倒的優位がらがけつぷちに追い込まれた——！》

皮余りのペニスから放水車も顔負けの大量放射。リングの上でオナニーするという背徳感が彼女の興奮を何十倍にも後押ししているのだろう。美結は冴香の射精を見るのは二度目だが、前回の新人戦の時よりも数段濃度の高い白濁液が大体育館の吹き抜けの天井にまで噴き上がりリングとその周囲の観客に無差別に降り注ぐ。

熱くドロドロな液体と固体の中間物質は、さながら溶岩のごとし。

室戸冴香は己のペニスという活火山から、容赦なくそれを噴き上げて会場中に大災害を巻き起こしている。

「さ、冴香あ……！」

美結はどうすることもできず、彼女の精液を頭上から浴び続けて呆然と立ちすくみ、我に返って自分のペニスを舐めている北条に食って掛かる。

「や、約束が違うよお……！ 冴香に射精させないって約束で私ちんぽ突き出して……んほおおおお、ちんぽちんぽおおおお——！」

「バカね、敵の言ったコトを真に受けるなんて！ ちんぽも性根もまつすぐすぎるのがあるの弱点よ、新米ピュアちんぽファイター天音さん？」

「あとは射精寸前まで高まったあなたをイカせれば、聖珠学園は三回射精で終わりよ！」
あまりにも絶望的な状況下だ。

冴香も美結も射精してしまい、美結は射精寸前にまで追い詰められている。

「勝ったわ！ さあイきなさい天音さん、思いつきお客さんの前で敗北ザーメンを噴き出すのよ！」

「ダメえちんぽ、ちんぽイクつ、ちんぽちんぽおおお——っ！ もうダメ、ダメダメ、敗北精液発射準備完了だよおおおお！ ちんぽおおお——！」

最後の一押しをかけようと、手コキの勢いを強くする北条。

精液は尿道を駆け上がり、鈴口がぱつくりと開いてその瞬間を告げる。

もはやここまで、万事休す。

「——そうはいきませんよ」

が、美結が敗北精液を噴き上げるその刹那。

冷たく抑揚のない声が響き、美結の瞳に光が宿る。

彼女の身体は敵から引き離され、目の前には純白の着物コスチュームの少女の背中があった。

「冴香!! 冴香! 洗脳が解けたんだね!!」

「ようやく目が覚めました、あの催眠は私の性欲に反応して脳に働きかけていたようで、一度出して賢者タイムになれば自然に解けるようですね」

《室戸復活した——! 催眠から解けた室戸冴香が絶体絶命の天音を救出——! 会場が

一瞬で最高潮に燃え上がった、津波のような歓声であります!》

冴香は表に出していいだけで、性欲の強さは美結を遥かに上回る。

その大振りな金玉と射精量が何よりの証だ。

性欲が半端でなく強いおかげで、一度精液をすべて出し切ってからでも十カウント以内に再勃起できる程度には精液が回復できるし、そのための鍛錬も昔からしているのだ。

完全に娯夢学園側の計算ミスだ。

「し、しまった……四大流派の性欲と回復力を侮っていたわ……」

「よくもこの私に恥ずかしくて気持ちいい思いをさせてくれましたね、覚悟はいいですか」
絶対零度のちんぽ鬨気を噴き上げ、冴香は敵の前から姿を消し。

《消えた！ いや上だ——！》

次の瞬間、石川麻友の真上から落ちてきた。

雪のようにふわりと、肩車のような体勢で彼女の肩に乗っかり。

下に伸ばした足で、彼女に乗ったままペニスを扱きあげて射精させる。

「——室戸流『月』の五手、『かげんのつき下弦月』」

「おっほおおお——！ ちんぽちんぽおおおおおお！ 敗北射精きたあああ

——！ 勝てないからって催眠アプリ使っちゃう卑劣ちんぽファイターの無様な最後見て

ええええ——！ 卑怯な手を使ったちんぽファイターの末路なのおお、結局敗北射精し

ちゃうのおお——！ 気持ちいい、気持ちいい、卑怯な手を使った因果応報射精きもち

いいいい——！」

《やったー！ 室戸流の性技炸裂、三回射精で聖珠学園の勝利——！》

一秒も持たず相手は白濁液を噴き上げ、冴香ははまだ石川に乗ったまま足コキで精液の勢いを加速させる。

たっぷり三分以上射精しぐつたりとマットに倒れ込む石川と、彼女を助け起こそうとする北条に。

「まだ終わってないんだからね！ 私たちを同士討ちさせて、冴香との絆を一瞬でも断ち

第8話 夏季F T B都大会二日目

夏季F T B都大会、二日目。

美結たちは昨日と同じ会場に再来し、準々決勝となる四回戦へ向けて軽く動いて体を温める。

「調子はいかがですか」

「うん、ビンビン!」

美結も冴香もコンディションは良好だ。

三回戦では敵の催眠アプリにかかって不覚にも一回ずつ射精してしまったものの、好成績でトーナメントを駆け上がっている。

ここままで残っているふたなり学園は八校。

もちろん、最大の強豪校である剛根学院もしっかり残っていた。

(やっぱり剛根とはこのまま決勝で戦うことになりそうだね……)

一日目の通算成績も出ているが、剛根は昨日の三試合で一度も射精していない。

一年生エースの黒崎夏希も半端でない実力者だが、なによりもその相手である剛羅万碎

子——四大流派筆頭、剛羅流の血を引く彼女の圧倒的なまでのちんぽ破壊力に、対戦相手はことごとく崩壊射精させられてきたという。

（だいたいあの人もう見た目からおかしいって言うか人外だもん！ 一人だけ作画が違
う感じだよ！ 怖すぎだよ！）

美結は心の中で愚痴るが、あれでも女の子であり、ちんぽファイターらしい。

ともあれ剛根と戦うまでに、あと二戦消化しなければならず。

《準々決勝第一試合、聖珠学園対神性女学院！》

「よし！ 行こつ、冴香！」

「ええ」

アナウンスにより出番がやってきたことを告げられ、美結と冴香は戦いの場へと赴く。

リングに上がって制服を脱ぎ捨て、二人はリングコスチュームになり。

そこで観客は一気に燃え上がり、戦いの高揚感でペニスは痛いほどに勃起する。

（よし、誰が相手でもちんぽ負けないっ！）

美結が改めて気合を入れていると、相手校もリングインしてきた。

落ち着いたデザインの学生服を脱ぎ捨て、神性女学院の二人はちんぽファイターの戦闘服になる。

「神性女学院、清澄遥！^{きよすみはるか} 迷えるちんぽに救いの手を！」

「神性女学院、水天宮聖！^{すいてんぐうひじり} 穢れた性欲を祓きましょう！」

（しゅ、宗教系なんだ!!）

美結も驚く。

まさにシスターといった感じのリングコスチューム。

いわゆる修道服がベースで色合いも紺だが、もちろんF T Bのリングコスチュームゆえ大幅なアレンジが施されている。

頭にはシスター服といえばアレといった感じの頭巾^{ウィンブル}をかぶっていてそこはまだ原形を留めているのだが、トゥニカと呼ばれるワンピース状のシスター服の胸元は大きく開いていて二人ともに豊満な胸が三分の二以上露出しており、首から下げた金のロザリオが谷間に落ちてゐる。さらに下半身となると前側の布は存在せず、両者とも二十五センチを超える大振りなズル剥けの勃起した男性器がむき出しである。

一見するととても聖職者の格好とは思えないが、修道服のコンセプトとF T Bの衣装としての方向性が両立された、聖なるちんぽファイターとしてこれ以上ないほどに完成されたリングコスチュームだ。

《出ました神性女学院！ ただの学園ではありません、ふたなり界限において最大規模を

誇る宗教『ふたなりちんぽ教』の総本山でもあり、近年では修行の一環としてFTBも盛んに取り入れている歴史ある宗教系ふたなり学園の登場です！ ふたなりゆえの過大な性欲を厳しく律し、心身を鍛え抜いて戦うふたなりちんぽ修道女^{シスター}！ その実力は決して低くありません！』

「聖ちゃん！ 俺の性欲も祓ってくれー！」

「遥さん！ 俺本体ごと煩惱を浄化してください！」

アナウンサーによる紹介に、観客も大いに盛り上がり。

美結は彼女らの股間にそびえ立つ、可憐な顔立ちに似合わぬ逞しい男の象徴に目を奪われていた。

（二人ともちんぽおつきい……さすがに準々決勝まで上がってくるとみんなちんぽおつきいよね……）

美結の二十六センチの逸物もクラスで羨ましがられるほどかなり立派なものだが、ここまで上がってくるとありふれていて自慢にもならない。

「まず私が行きましようか、相手も相当な手練れです、油断せず行きましよう」

「うんっ、お願い冴香」

冴香が前に出て、神性側は金髪のほう——清澄遙といったか——が出てくる。

高らかにゴングが鳴ったが、互いに動かない。

「四大流派にも性欲はあるのですか？　ならそのちんぽから穢れた欲望を一滴残らずお祓い射精して差し上げましょう」

「あなたの器には収まらないかもしれませんよ、この金玉に渦巻く性欲は」

言葉を交わしつつ、冴香も遙も相手の様子を窺いじりじりと間合いを測る。

《準々決勝ともなると互いに迂闊^{うかつ}には攻め込めません、緊迫した雰囲気^{うきけつ}が会場に広がっていきます。四大流派の室戸に聖なるちんぽパワーは通用するのか、逆にその性欲に清澄自身^{みづか}が呑み込まれるのか》

万単位の観客も静まり返り、固唾を呑んで両者の静かなやり取りを見守っているため実況の声がよく通る。

準々決勝ともなると試合の質も高くなり、見ている側も緊張するのだ。

長い膠着状態の後、先に動いたのは冴香。

《室戸動いた！　大きく後退してロープの反動を活かし……飛んだあつ！》

綺麗な放物線を描き、高く飛び上がって空中から強襲をかける冴香。

観客も一気に盛り上がり、静寂から大興奮へと場の空気が切り替わる。

「室戸流、『月』の七手『落月^{らくげつ}』」

「くうっ！」

《お——とかわされた！ 室戸足から着地、すぐに間合いをとって仕切り直します！》
が、敵もさるもの。

とつさに転がって冴香の落下攻撃を回避し、瞬殺を免れる。

観客も清澄遙の素早い反応に、おおっと声を上げる。

（ああつ、室戸流の性技がよけられた！）

美結も驚く。さすがに敵もただではやらせてくれないようだ。

が、冴香はそこまで驚いていないようで、むしろ敵を賞賛するほど余裕がある。

「よく反応できましたね、頭上という人間の死角を取られておきながら」

「侮らないでください、それでも修道ふたなりですから。厳しい修行という点ではあなたと似ているかもしれませんね」

「……なるほど、ではその修行の質の差をお見せしましょうか」

最後の一言が余計だったのか、冴香のエメラルドの目が引き絞られ。

短い銀髪をふわりとなびかせ、一瞬で遙の背後を取る。

「速……っ！」

《室戸背後に回った！ そして驚愕する清澄の股下から両腕を入れて、ちんぽを後ろから

両手で握り込む！』

ただ足の間から腕を入れたのではなく、腕を交差させて遙の男根を両手で包み込み。そこから一気に腕を回転させ、それによる快楽で射精に持ち込む。

「室戸流、『雪』の四手『吹雪』^{ふぶき}」

「ほおおおお——！ 出る、出る、出てますうう！ ちんぽミルク出てますうう！ あはああダメっ、ダメダメダメええ！ 性欲を祓うちんぽシスターが煩惱まみれ射精するなんてダメですううう！」

一瞬にしてペニスを包んだ両手を一回転、その超速の摩擦がもたらす快感が容赦なく清澄遙を敗北射精へと導く。

《いった——！ 清澄、室戸流性技で強制射精だ——！ 三百六十度の回転摩擦での変則手コキであります！ 自らの煩惱にも負けたふたなりちんぽシスター、二重の意味での敗北射精の快感はいかほどか——！》

顔を真っ赤にして涙目になり、首をぶんぶん振って清澄遙は射精の快楽に全身をゆだねて特濃の白濁敗北液をリング外へ放出する。

「かつ、かみさまあ！ 神様が見てらっしゃるのにいいい！ 神様が見ていらっしゃるのに敗北射精いいい！ ごめんなしいつ、ちんぽシスターなのに礼拝オナニー以外で射精

してごめんなしやいいい！ あはあああつ、ちんぽ気持ちいいいい——！」

「これが修行の質の差ですよ、まだまだそのちんぽに分からせてあげます」

冴香の快樂攻撃はまだ終わらない。

射精し続けるペニスを右手で扱いてさらに勢いを倍加させ、左手で金玉を優しく愛撫しながら肛門に舌を入れていやらしく舐め上げ。

その三点の快樂責めで、遙を神とやらの前で盛大に煩惱敗北射精させる。

「らめえええ！ もうそれ以上射精らめえええ！ 神様の前で煩惱射精だめれすううう！ ちんぽシスターが射精していいのはお祈りオナニーで射精するときだけなんですううう！ それ以外はいけない射精つ、いけない射精なのおお！ 煩惱で射精すると神様に怒られちゃうのおおおお！」

「違いが分からないんですが？」

「ちがうつ、ちがうのおおお！ ぜんぜんちがうのおおお！ 主よ、お許してください、遙は煩惱に負けてつ、オナニーじゃない射精でつ、いけない射精で気持ちよくなっちゃうちんぽシスターですうううう！ 懺悔しながらちんぽ気持ちよくなっちゃってつ、敗北射精してごめんなしやいいい！ んほおおおちんぽ、ちんぽちんぽおおお！ 煩惱ビンビン勃起ちんぽから汚い汚いぶりつぶりの特濃欲望ザーメン射精もぢいいいいい

——！

たつぷり五分ほど射精させ、レフェリーにより冴香は制止され、アナルから舌をつぷりと離してニュートラルコーナーへ。

「あへえええ……神様ごめんなしい……煩惱敗北射精気持ちいいのお……俗世に帰っちゃいますうう……」

「まったく、この程度で煩惱に負けるとは。私の方がちんぽシスターの才能が高いのでは」会場の巨大電光掲示板、その「清澄遙」の文字の前に射精済みであることを示す赤いランプが一つ灯る。

《聖珠、まずは一本先取であります！ 一度かわされたが室戸流の性技は四十八手、全く不利を感じさせない底の深さだ！》

「美結さん、交代です。ただし油断せずに」

「うんっ！」

一回先制して有利になったことで、冴香は美結にも活躍の場を与えんと交代する。

勝つだけなら自分が続投してもいいが、それではわざわざタッグマッチを見に来ている客が楽しめない。

観客を盛り上げてこそちんぽファイターなのだ。

それに美結が一回射精してしまっても、まだもう一度射精が許される。

《さあ、まだ射精カウントは一回のみ！ 神性女学院にもチャンスは残っております！ 両陣営ともに交代し、天音美結と水天宮聖の対決になりました！ ちんぽシスターの聖なる猛攻を天音かわし切れるか！》

「行きますよ！」

修道服コスチュームをなびかせペニスを揺らし、黒髪ロングシスターの水天宮聖が正面から突撃してくる。

素早く鋭い貫手の乱打。精神のみならず肉体も鍛え上げている、修行僧を思わせるかのような巧みな身のこなしに空手有段者である美結も防戦を強いられる。

「くっ、隙がない……！」

「今ですっ！」

一瞬だけガードが崩れ、そこに二十五センチ強の剛直が唸りを上げて美結の男性器を直撃する。

「ホーリーちんぽストライク！」

「はひひいんっ！」

《強襲——！ まともに聖なる一撃を食らってしまった！ 高いちんぽ攻撃力に聖属性が

乗り、天音のペニスに大ダメージだ！」

どの辺が聖なる力なのかよく分からないが、単純にして強烈な一撃であることには間違いない。

こらえがたい快感でふらつき隙のできる美結に、聖はさらなる連続攻撃を仕掛けてくる。美結に抱き着くようにして密着し、彼女の巨根に自らの聖根をあてがいグイグイと押し付けてきたのだ。

「セイクリッドちんぽアンセム！」

「おつ、ほつ、ほおおおお——！ ちんぽ、ちんぽ、ちんぽおおおお——！ ちんぽおおおおおおお——！」

《美しく強烈なちんぽの擦りつけ攻撃だ！ さながらヴァイオリンの弓のごとし！ その快楽によって相手は讚美歌のごとき高く澄んだ喘ぎ声を上げてしまうことから讚美歌と呼ばれるこの聖なる性技！ 天音これは気持ちよさそうだ、人間ちんぽヴァイオリンと化した天音の口から悦楽の讚美歌が奏でられてゆく！ ちんぽバトルを見に來たはずなのに会場に來てみたらちんぽコンサートだった——！》

「ほおー！ ほおお——！ ちんぽおおお——！ ちんぽおおお——！ 気持ちいいいい——！ ちんぽこすられるの気持ちいいのおおお——！」

（わっ、私がつ、こんな綺麗な声出せるなんて……！　ちんぽファイターじゃなくてちんぽ歌手になれちゃうかも……ち、ちがう、そんなこと考えてる場合じゃないっ、抜け出さないと射精しちゃうっ！）

澄んだ嬌声を上げつつも、力づくでなんとか聖のホールドから逃れて荒く息を吐く美結。そこに、先ほどの冴香の性技によって射精していた相方の清澄遙が復活してリングインしてくる。

「行きますよ、シスターヒジリ！」

「ええ、シスターハルカ！　神の名のもとにあの技を！」

《天音射精寸前のピンチに清澄遙がやってきた！　ツープラトン攻撃を仕掛ける気だ！　聖なる合体技、まさかアレを繰り出そうというのか！》

フラフラな美結の背後に遙が回り込み、聖は正面から美結に組みつき、二人同時に下半身を攻めあげる。

「さあ、いたずらに射精し命の素を粗末にした罪を悔い改めなさい！」

「ディヴァインちんぽサンクチュアリ！」

《いった——！　二人がかりの合体技、前後からがつちりホールドしての口と手による快樂攻撃！　彼女らに挟まれた空間こそがまさに快感の聖域！　この『性域』から逃れるに

サンクチュアリ

は射精することですべての罪を洗い流し切らねば脱出不可能だ——！」

「おほおほおほ——！ ちんぽ、ちんぽ、ちんぽおほおほおほ！ これきついつ、これすごいのおおお！ 逃げられないつ、ちんぽ逃げられないいい——！」

容赦のない前後からの聖なる快樂攻撃に、美結は為す術もない。

またも先ほどのように美しい嬌声を上げ、ペニスへの快樂に身を震わせて喘ぐのみだ。

「ちんぽ清められちゃうつ、性欲全部出されちゃうううう！ 欲望ミルク全部摘出されてふにゃふにゃの萎えちんぽになっちゃうよおおおおお！ ちんぽで戦えなくなっちゃう、性欲なくなったらちんぽバトルできないいいいい！」

顔を真っ赤にして涙目になる美結に、背後から金髪ふたなりシスター清澄遥が本来の意味での「説教」を始める。

「そう、闘争本能と性欲は元をたどると同じ煩惱なのです。性欲があるから勃起して戦いたくなりますし、戦いの高揚感で性欲が湧いてしまう悪循環なのです。この忌まわしき欲望を排除してこそ、ふたなりとして真実に通じるのですよ。あなたもちんぽファイターなどおやめになって、我らふたなりちんぽ教に入信なさい」

「そつ、そんなのやだあああ！ 私はちんぽファイターなのつ、ちんぽで戦いたいのおおお！ だいたいそんなこと言ってるあなたたちだって今こうしてちんぽでバトルしてるの

にいいい！」

美結は必死に言い返すが、ちんぽシスターたちは動じずに美結を前後から責めあげていく。

「お生憎様あいにくさま、私たちはあなた方ちんぽファイターをこうして敗北射精させて入信させることで、欲望まみれの俗世間から足を洗って清廉な信徒にさせるべく戦っているのです。一緒にしないでくださいませ」

「言ってみれば私たちは、ちんぽ神様から遣わされた聖セイちんぽファイター。あなたたちのような快楽と闘争本能で戦っている野蛮なちんぽファイターとは本質から異なるのです。分かったら入信の意志を示すべく、主の代理人である私たちの前で射精なさい」

《言っていることはなんだかよく分からないが天音を敗北射精させてついでに入信させようとしているのは明らかだ——！ 天音、このままでは敗北どころか入信射精させられてちんぽファイターを引退してしまう！ ペニスで戦いたいなら抜け出すしかありません！ ちんぽバトルの世界に残るか残らないかの瀬戸際だ——！》

金玉を手で優しく愛撫されながら、舌で竿を舐め上げられ。

かと思えばクリトリスをつまみ上げられ、尿道を指でほじくり返される。

「おほおお、ほおおおおっ！ ほおおおちんぽおおおっ、まんこおおおお！ ちんぽ



もまんこも気持ちいいつ、男の子と女の子ダブルアクメしちゃう、敗北入信射精決めちゃうよおお！　ちんぽ、まんこ、ちんぽおおおお！」

必死に抵抗する美結だが、聖と遙は亀頭を優しく舌でねぶりながら甘い誘惑を囁いていく。

「御安心なさい、ちんぽ教の決まりは一日三十回、メッカとなる我ら神性女学院大聖堂の方を向いてお祈りオナニー射精すればいいだけです。たったそれだけであなたも幸せになれるのです」

「そつ、それだけええ!!　それだけでいいなんてとっても簡単だよおお！　一日三十回射精なんて余裕すぎりゅううう——！　おほおおお、ちんぽおおおお！」

「落ち着いてください、変な物買わされますよ！」

さすがに見かねた冴香がカットに向かう。

このままでは美結は敗北射精するだけではなく、変な宗教に入信させられてしまう。しかし。

「布教の邪魔はさせません！」

《おーつと清澄遙、合体技を解いて室戸の方に向かいカットを妨害！　天音の方の拘束も緩んだが時すでに遅いつ、快樂で抵抗できなくなった天音に……》

「さあ、聖なるちんぽの剣（つるぎ）であなたの邪氣を打ち払って差し上げます！」

正面から美結を捕らえている水天宮聖が、己の聖根を美結の女陰へ狙い定めて一撃のもとに奥まで突き挿れる。

「んああああ——！ ちんぽ入ったああああ——！ 聖なるちんぽがつ、私のまんこに
いいいい！ 挿れられただけでまんこイクううう——！」

《破邪顕正——！ 水天宮の肉棒が天音のヴァギナに挿入された！ 天音、身体を仰け反
らせて絶頂しています！ 射精はしていませんが女の子の方は挿れられただけで即イキで
あります！ 聖なるちんぽは性欲まんこに効果抜群だ——！》

「美結さん！」

遙に抱き着かれながら、冴香は相棒が犯されたことに声を上げる。

聖は華奢な体躯ながら、男もかくやといった荒々しい腰遣いで一切の容赦なく美結をえ
ぐり抜いていく。

さらに空いた手で美結のペニスを乱暴に扱きあげ、男性器と女性器に激しい快楽が寄せ
ては返す波のように襲い掛かる。

「あへえええイクっ、イクイクイクまんこイっくうう——！ 一番奥までちんぽでえぐ
られてるのっ、赤ちゃん作るところまで犯されてるのおおお！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
各雑誌版は奇数月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE



コミック
UNREAL
O M I C



**敗北乙女
エクスタシー**

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

KTC 編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! **キルタイムコミュニケーション**

検索

二次元ドリームノベルズ

金肉英雄
タイタス

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

小説家になるこの男性向けサイト
「アクトアインノベルズ」
から書籍化！

姫騎士 クラスメイト！

女刑事美優
職務は自らの身体

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍で読める「エッセイ」

フリーダム120%!?
ジャンルにとわれない
ドキドキラブ！

タイタス
金肉英雄

二次元ぷち文庫

夢世界
ドキドキ
ラブ
タイタス

ドキドキラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫